マルクス主義受容以前の李大釗初探

川　尻　文　彦

李大釗（1888–1927）は近代中国におけるマルクス主義紹介の先駆者として高い評価を与えられてきた。その際、単にマルクス主義理論を中国に紹介しただけではなく、李大釗による主意主義的（ヴォランタリスティック）なマルクス主義解釈が「主観能動性」をとなえた毛沢東につながるという観点から高い評価が与えられてきたといえる。つまり毛沢東で完成を見たマルクス主義の「中国化」「土着化」に功績があったというのである。李大釗は、マルクス主義が説く、下部構造、経済決定主義に傾かず、社会的矛盾を自覚した人間の主体的な行動や自覚が歴史発展に対する影響を重視する立場である。西欧のマルクス主義理論の直輸入ではなかったのである。

汗牛充棟の感のある中国大陸における李大釗を顕彰する研究はまさにそのような観点からのものである。画期的な李大釗研究とされ、日本の学界でも大きな反響を呼んだメイスナーの『中国マルクス主義の源流――李大釗の思想と生涯』（平凡社、1971年）（M. Meisner, *Li Ta-chao and the Origins of Chinese Marxism*, 1967）は、そのような観点を補強する代表格であったといえるだろう。

なお近代中国のマルクス主義に関連して「南陳北李」という言葉がある。中国共産党創立当時（1921年、上海）、上海を中心に活動した陳独秀、北京を中心に活動した李大釗という意味であり、初期の中国共産党において重きをなした二人物を形容している。李大釗より10歳年長の陳独秀（1879–1942）は共産党員になる以前にはデモクラシーとサイエンスを提唱した啓蒙雑誌『新青年』でも中心的な役割を果たしたほか、中国共産党の組織運営にも力を発揮した。しかし、陳独秀に比べ、李大釗はマルクス主義に対して理論的、体系的な著作をより多く残しており、近代中国における知識人たちのマルクス主義理解に大きな影響力を有していた点が特筆される。私たちが李大釗のマルクス主義を研究しなくてはならない所以である。

李大釗と日本

李大釗は1889年に河北省楽亭県の農村に生まれ、幼時より科挙合格を目指して私塾に通った。また当時の習慣にならい、10歳で同村の趙紉蘭（李大釗6歳上）と結婚している。しかし、1905年に科挙の廃止が決まると、地主であり地元の名士でもあった祖父（李如珍）の死によって家計が悪化したこともあり、学問の道をあきらめ永平府中学堂の学員となった。その後、親類の学資援助を得て1907年に天津の北洋法政専門学校に入学し、1911年の辛亥革命を間に挟んで、1913年に卒業した。在学中、吉野作造（袁世凱の息子の家庭教師として中国に渡った）や今井嘉幸（国際法を教えた。後に代議士）も在籍していたが、直接の教えをうけたかどうかは定かではない[1)]。卒業後、北洋法政学会を組織し、雑誌『言治』刊行し、言論活動を開始した。『言治』の創刊号には、中里彌之助（介山）の「トルストイ言行録」（中国語訳「トルストイ主義の綱領」）を翻訳発表している。ここから革命を悔い改めであると見なすトルストイ思想の李大釗への影響を見出すことは容易だが、天津での日本語学習の成果ともみなすことができよう。

その後、1913年冬に、袁世凱とも近い関係をもっていたとされる進歩党の湯化龍、孫洪伊の資金援助で日本留学を果たした。湯化龍は天津での李大釗の人格・能力を高く買っていたのである。李大釗とは後に思想的立場を異にする湯化龍、孫洪伊との関係は生涯続いたとみられる。李大釗は、東京では牛込区戸塚町五二〇番地の基督教青年会（YMCA）に住み、日本語や英語の勉強をしつつ、1914年9月より早稲田大学本科政治経済学科に入学を許され、主として経済学を学んだ。

日本での李大釗については彼自身が日本留学について語ることがなかったため、史料的な制約から未解明の部分が多い。森正夫の資料発掘に始まり[2)]、冨田昇の研究がある[3)]。森正夫は早稲田大学での成績表など李大釗に関連する資料を発掘した。その成績表には、1915年7月の第一学年の必修科目（11科目）の学年末試験の結果が記されており、早稲田大学での受講科目とその成績が分かる。

浮田和民教授・国家学原理、美濃部達吉教授・帝国憲法、天野為之教授・応用経済学、塩沢昌貞教授・経済学原理、浮田和民教授・近代政治史、牧野菊之助教授・民法要論、井上忻治教授・刑法要論、吉田巳之助講師・ポ

リティカルクラシックス、伊藤重治郎教授・エコノミカルクラシックス、宮井安吉教授・英文練習、牧野謙次郎教授・論文（日本語作文）である。これを見ると正規の日本人学生と同じ授業内容を受講していると見なせる。

冨田昇はさらに反二十一カ条要求闘争に関する在日中の資料を補充した。周知の通り、1915年1月、加藤外相は日置公使を通じ、五号二十一か条からなる要求を受諾するよう、大総統袁世凱に申し入れた。このことに対して留日中国人学生の世論が沸騰した。李大釗もその渦中にあり、留日学生総会を組織するとともに「全国の父老に警告するの書」「国民の臥薪」等の救国パンフレットを発表した。留学生界においても頭角を現した。翌年の帝政復活を宣言した袁世凱を批判する反袁世凱闘争へとつながっていく。

李大釗が日本にいたのは1914年1月から16年5月まで2年数か月に過ぎない。しかし、李大釗はその後もしばしば、「余曩居日本」「余前歳居日本」「往者余居日本」「往者愚在日本」等の語を使っており、日本での生活体験が彼の著述活動や思想にも反映していることを示している。

李大釗と章士釗

日本滞在時の李大釗について私が重視したいのは、章士釗（1881–1973）との交遊である。章士釗についてはこれまで様々な要因から研究蓄積が乏しく、専著も数えるほどであり[4)]、未解明な部分が多かった。おそらく1924年、章士釗が段祺瑞政権に加入し、呉稚暉、胡適、魯迅、陳独秀等多くの知識人からの批判を浴びたことや日中戦争時期に民主党派のメンバーとして名を連ねたことなどが影響している。近年、『章士釗全集』（文匯出版社、1999年）もようやく刊行され、研究も盛んになってきたばかりである。

章士釗は1881年生まれ、字は行厳、筆名は黄中黄、秋桐など、湖南善化県出身。1903年の拒俄運動の中で上海に赴き、蔡元培の軍国民教育会に参加した。この頃、宮崎滔天の『三十三年の夢』を『大革命家孫逸仙』と題して中国語に翻訳し、まだ無名だった孫文の名を中国人の世界に広めるのに功績があった。これと同時に翻訳者である章士釗の名も広く世に知られるようになったと言えよう。上海では『蘇報』の主筆となり、革命言

論を広めた。1907年にはスコットランドに留学し、法律、政治学、論理学を修めた。辛亥革命後に急ぎ中国に帰国し、『民立報』を創刊した。章士釗は豊富な政治学上の知識をもとにイギリス流の議会論を提唱したこと、民国初期の政治的混乱、袁世凱の独裁や軍閥や政党政治の混乱の状況の中で政治的な諸勢力の統合を説く「調和論」といわれる立場を主張したことで今日知られている。そのような言論を展開し始めたのが、1914年に東京で創刊された『甲寅』雑誌である。章士釗の著名な「政本」（1巻1号、1914年5月）、「調和立国論」（1巻4号、1914年11月）が掲載されている。この「政本」で章士釗は「好同悪異」（同じを好み、異をにくむ）に強く反対した。私利私欲にもとづいて離合集散を繰り返す政客たちに批判の矢を向けている。「好同悪異」とはつまり多元的な価値の併存を認めない思想であるからである。

章士釗と李大釗の交誼が始まったのはこの頃であった。章士釗はそのすぐれた学識と人格で、若い中国人留学生に対して人望があった。7歳下の李大釗も章士釗を慕っており、「調和論」をはじめ思想的に強い影響を受けた。政治的立場が異なった時もあったが、生涯にわたり公私の付き合いを続けている[5)]。

李大釗が章士釗に出会ったのは、1914年夏である。1913年冬に東京に渡った李大釗はその後、章士釗を小石川林町の自宅に訪ね、面識を得る機会を得たとみられる[6)]。しかし、李大釗は章士釗が創刊した『独立周報』を愛読していたというから、章の名前は以前から知っていた[7)]。

李大釗は章士釗の誘いで『甲寅』（1914年5月、東京で創刊）に投稿するようになった。『甲寅』は章士釗が時世の弊害をひとつひとつ取り上げ、着実に論述する（条陳時弊、朴実説理）ことを旨とした雑誌であり、特定の主義に立たないものであった。その政治的な是々非々主義や妥協主義から調和論に通じるものであった。その背後には、袁世凱の独裁の進行、孔教復活の動きに対する批判があったと見られる。

李大釗は『甲寅』を舞台にして明治大学に留学していた高一涵（1885–1968）とともに迫力のある文章を次々に発表し、高・李と併称された。李大釗は「物価与貨幣購買力」（第1巻第3号、1914年6月）、「風俗」（第1巻第3号、1914年6月）、「国情」（第1巻第4号、1914年11月）、「厭世心与自覚心」（『甲寅』第1巻第8号、1915年8月。陳独秀「愛国心与自覚心」『甲寅』第1巻第4号、1913年11月への反論）等の論説を発表した。

「国情」は袁世凱帝政化とそれを支持する有賀長雄（1860–1921）、グッドナウ（古徳諾 Frank Johnson Goodnow）（1859–1939）への批判である。

日本では哲学的色彩の濃い一連の論説を発表している。「国民之臥薪」、「厭世心与自覚心」「青春」「民彝」「「晨鐘」之使命」「新生命誕孕之努力」「介紹哲人托爾斯泰」「介紹哲人尼杰」「自然的倫理観与孔子」等。後藤延子によると加藤弘之「自然と倫理」（1912年）と「自然的倫理観与孔子」の類似性が指摘できる。

また「青春」（日本で執筆され翌年『新青年』第2巻第1号、1916年9月に掲載）、「今」等の論文は壮大な宇宙論を展開した[8]伝統中国の詩文調の論文であり、李大釗の初期思想発展の観点から研究者に重視されてきており、さまざまな分析がなされてきた。郭湛波は『近五十年中国思想史』の中で「青春」に唯物弁証法的宇宙論を見出し、「物質変動与道徳変動」（1919年）の唯物史観へとつながると指摘している[9]。ベンジャミン・シュウォルツはイギリスの詩人であるエマーソンの影響を指摘しつつ、伝統的中国思想とヘーゲル思想の双方が後のマルクス主義の受容を容易にしたと考える[10]。

しかし、この「青春」は茅原華山の論説「悲壮なる精神（山をして我に来らしめよ）」（1916年[11]）の「焼き直し」という指摘がすでにあり[12]、李大釗のオリジナリティーには疑問が付されている。しかし、この時期の李大釗の難解で詩的な文体がこの「青春」の特徴として指摘できるであろう[13]。後に胡適がその『五十年来中国之文学』の中で、甲寅派に言及し、「章士釗の一派は厳復、章炳麟の両派から出てきたものである。……甲寅派の政論文は民国ではほぼ重要な文派をなしていた。しかしこの一派の文章は、なすことが容易ではなく、通俗的でもなかったので、実用においては依然失敗に帰するより仕方なかった。このためこの一派の中心メンバーである高一涵、李大釗、李剣農などは、後に白話散文の作者となった[14]。」とあるように、文体の面でも李大釗は章士釗の影響を受けていたことが分かる。

『甲寅』日刊と李大釗

1915年12月に袁世凱により第三革命がおこると李大釗は中国の動きにいてもたってもいられなくなった。1916年初夏、日本での勉学を中断して中国に帰国することを決意した。中国各地で反袁世凱闘争が激化する中、

6月袁世凱は死去した。

その後、章士釗の招きで、1917年1月から5月まで『甲寅』日刊（北京）の編集を高一涵とともに担当することになった。この時期、李大釗は非常に多作で多くの論説を発表したが、そのほとんどの『甲寅』に発表していた。さらに李と高は一日交替で社説を記した。高一涵の回想によると、彼らは梁啓超ら研究系を攻撃し、段祺瑞らの現政府を攻撃したため、段祺瑞政権との「調和」を目指していた章士釗と仲違いをしたとある[15)]。この証言にこれまで多くの研究者が依拠してきた。しかし、当時はまだ李大釗は研究系や段祺瑞政権を批判しておらず、まだロシア10月革命以前の段階であり、章士釗とは政治的に分岐しておらず、両者ともに「調和」の立場にいたとする説が近年有力である[16)]。

1917年7月、北京で張勲のクーデターが起こり、章士釗が北京を離れざるをえなくなり、あわせて150期を出したところで、『甲寅』の休刊を余儀なくされた。李大釗も上海に逃れ、孫洪伊宅に寄寓した。

この『甲寅』が発行されていた時期に、専制王朝を倒したロシア2月革命が起こった。さらに10月革命へと続いていく。ロシア革命の経過を注目していた李大釗はロシア革命や欧米の政治状況を紹介する論説を『甲寅』に数多く発表した。これらは当時の中国において最も早く、詳細な欧州事情の紹介であると言ってもよいが、従来あまり注目されてこなかったものである。

欧州事情に言及しているものについてざっと目次を挙げてみると以下の通りである。

「俄国革命之遠因近因」 3月19日〜21日
「法国内閣改組之由来」 3月24日
「麵麭与和平運動」 3月25日
「俄国共和政府之成立及其政綱」 3月27日
「俄国大革命之影響」 3月29日
「戦争与人口問題」 3月30日
「大戦中欧洲各国之政変」 4月1日
「大戦中之民主主義（Democracy）」 4月16日
「大亜細亜主義」 4月18日
「罪悪与懺悔」 4月21日
「欧州各国社会党之平和運動」 4月24日〜5月5日

「自由与勝利」 5月21日

これら一つ一つについて詳しく分析を加える余裕は今はないが、これらをめくってみるとその文面から日本語の総合雑誌の論説や外国通信社関係の記事を大いに参考にしていることが分かる。例えば、「俄国共和政府之成立及其政綱」には『時事新報』（東京発行）、「大亜細亜主義」には『中央公論』への言及がある。

この時期より少し後の1919年の前半に李大釗と交遊をもち始めた清水安三（ジャーナリスト、『支那新人と黎明運動』『支那当代人物』等で知られる）は、李大釗に鶴見祐輔、福田徳三、佐野学などの日本の言論人を紹介したり、堺利彦の出した『平民新聞』の取り寄せを手伝ったことを告白している。また「李大釗としゃべる時はいつも日本語で、魯迅みたいな達者な日本語ではありませんが、まあわからない日本語ではありませんでした。……李大釗はとにかく田舎の村長みたいな人、非常に親切でおだやな人、いつも興奮せず静かにしゃべる人」とその印象を語っている[17)]。

一連の論説を通じて分かることは、李大釗はロシア革命の実態に当時としては驚くべき早さで接触していることである。しかも、彼の関心が単にロシア革命だけではなく、世界の構造へと広がっているのである。それは主として大戦中の民主国陣営における「民主主義」の有りかたへの関心である。ドイツの敗戦、ロシアの専制体制の崩壊によって「民主主義」の勝利は李大釗において確信をもって受け止められたとみてもよい。そこには日本から中国への帰国直前に記した「民彝与政治」（1916年）において、伝統思想の「民彝」という概念を援用した李大釗のデモクラシー理解との連続性を見出すことは可能であろう。

しかし、注意すべきなのは、李大釗はこの時、ロシア革命に関する情報に通じてはいるが、マルクス主義に関する紹介はしていない。マルクス主義やボルシェビズムに対する関心は希薄なのである。つまり、1919年夏以前の段階では、李大釗はまだマルクス主義者とは言えない[18)]。

李大釗と「調和論」

前述の通り、「調和論」とは、第二革命に参加して日本に亡命した章士釗が、1914年東京で創刊した雑誌『甲寅』で最初に主張した。その後、袁世凱の死後、章士釗は1917年に北京で李大釗、高一涵らを従えて創刊

した『甲寅』日刊でも主張した。この『甲寅』日刊は6月に停刊するが、同年1917年3月に創刊されていた『太平洋』に受け継がれた。『太平洋』でも「調和論」が展開されて、1919年頃まで続いたと見られる。

李大釗は当初、天津時代の湯化龍、孫洪尹との関係から進歩党の見解に近かったと見られるが、次第に章士釗の思想的影響を受け、「調和論」的な立場に変わっていった。

マルクス主義転向以前の李大釗の「調和論」的な傾向を指摘したのには、先駆的には丸山松幸がおり[19]、村田雄二郎が李大釗の「平民主義」思想の内在的な発展の観点から李の「調和論」を詳細に跡付けている[20]。しかし、いずれも論文執筆当時の史料的な制約から、いずれも章士釗への言及は少ない。

李大釗の調和論は、1917年6月の張勲のクーデター失敗以降、段祺瑞政府と「安福国会」による政局と梁啓超らの研究会系を直接の攻撃対象として、『太平洋』雑誌や『言治』雑誌に掲載された一連の論文[21]によってうかがい知ることが出来る。『太平洋』は1917年3月に北京で創刊され、『甲寅』の執筆者でもあった李剣農が編集長であった。この『太平洋』創刊号（第1巻第1号）の巻頭論文には李剣農「調和の本義」が掲載され、章士釗の「調和立国論」を引用しながら、「調和」の意義を説いている。李大釗も『太平洋』（第1巻第6号）に「辟偽調和」（1917年8月15日）を発表し、対抗しあう諸政治勢力間の調和を説いている。李大釗の調和論は、章士釗の調和論を忠実に再現しており、独自性は少ない、しかし、宇宙論的自然現象を政治現象と同一視していることや社会・国家・世界の進化論を説くことが、章士釗の調和論にはない特色であると現時点では指摘できるだろう[22]。

『新青年』と李大釗

ちょうどこの時期、李は、『新青年』へのデビューを果たした。「青春」（『新青年』第2巻第1号、1916年9月1日）がそれである。その後、「青年与老人」（『新青年』第3巻第2号、1917年4月1日）、「今」（『新青年』第4巻第5号、1918年5月15日）、「新的！　旧的！」（『新青年』第4巻第5号、1918年5月15日）等、『新青年』に論文を掲載するのと並行して、『甲寅』日刊の編集に当たっていたことに着目したい。これまでは『新青年』

における活躍ばかりが注目されていたが、それ以前に『甲寅』で国際情勢に対する時論的な著述を行っていたことを確認しておきたい。

1915年に陳独秀らにより上海で発刊された『青年雑誌』は、翌16年には北京へと移り、『新青年』に名を改めた。李大釗は早くも『青年雑誌』(1915年9月）に「青春」を、「青年と老人」を『新青年』（3巻2号、1916年4月）に発表している。

1917年1月、北京大学の学長に赴任した蔡元培は「兼容併包」の方針のもと主義にかかわりなく多彩な人材を教授に招いた。陳独秀は1917年11月に正式に北京大学文科学長に就任した。『甲寅』で反袁世凱、反孔子の論陣を張った章士釗も論理学担当教授、図書館主任（館長）として招かれた。その章士釗の推薦により、1918年2月、30歳の李大釗は北京大学図書館主任、史学系教授（その後、政治経済学教授担当、1926年軍閥政府により辞任）として招かれることになった。北京大学に活動拠点を得た李大釗はますます精力的な活動を行った。

『青年雑誌』は創刊当初、知名度はなかった。『青年雑誌』が『新青年』と名前を改めた理由の一つには、上海基督教青年会で出していた『青年雑誌』と混同されるというクレームがあったからとの証言もある[23)]。執筆者からいっても第1巻はほぼ陳独秀の周辺にいた安徽省出身者、第2巻はようやく安徽省出身者の雑誌の性格を脱したが、依然として陳独秀の個人的な交際範囲を出ることはなかった。画期となったのは、陳独秀の北京大学文科学長への就任で、第3巻からはようやく章士釗、蔡元培、銭玄同など北大教職員関係者、惲代英、毛沢東などの学生らの投稿が出てくる。つまり陳独秀が北京大学の教授陣に加わることによって、『新青年』も最高学府の権威を得たのである。そのことによって『新青年』も安徽省出身者の地方雑誌から北京大学教授陣による全国雑誌へと変貌を遂げたと言えるのである[24)]。

また『青年雑誌』創刊当初は陳独秀自身の知名度も高くなく、雑誌編纂の経験も乏しかったので、東京ですでに『甲寅』を編纂していた章士釗を引きいれた。『新青年』に読者通信欄を設けたのも『甲寅』を継承したものであるとみられる。『新青年』はその形式面においても『甲寅』にその多くを負っていた[25)]。

第4巻からは周作人、沈尹黙らも加わり、陳独秀の独裁ではなく、編集会議がもたれるようになった。おおむね第5巻以降は輪番の編集体制がと

られるようになり、第6巻は陳独秀、銭玄同、高一涵、胡適、李大釗、沈尹黙の6名の北京大学教授による輪番体制が確立した。

さて、1918年11月、ドイツの降伏により第一次世界大戦が終了した。帝政を敷くドイツ、オーストリアが敗戦したことは、「デモクラシー」を掲げて戦った連合国側の勝利でもあった。連合国側の一員として参戦した中国では「公理が強権に勝利した」が人々の流行語にさえなった[26)]。

北京大学学長の蔡元培の有名な「労働神聖」を高らかに唱えた講演はこのような雰囲気の中で行われた講演会でなされたものであった。じつは同講演会は北京大学の教授たちが登壇して行った一連の講演であり、李大釗は蔡元培に続いて登壇し、「庶民の勝利」講演を行った。この講演会の内容は『新青年』第5巻第5号に掲載され、さらに同号には李大釗の論文「ボルシェビズムの勝利」も掲載された。

李大釗は『新青年』にロシア革命やマルクス主義理論の紹介で大きな意義をもつとされる著名な諸論文を発表している。「庶民的勝利」（『新青年』第5巻第5号、1919年1月[27)]）、「Bolshevism 的勝利」（『新青年』第5巻第5号、1919年1月）。

しかし後世、評価の高い李大釗「Bolshevism 的勝利」については張奚若（1889–1973）から「中身がなく、実際のボルシェビズムの政策について触れていない[28)]。」との厳しい評価がある。張奚若は『新青年』同人の学問は底が浅く、彼らの言論は道理と非道理が半ばしており、そのうちのいくつかは一知半解に過ぎないと酷評していた。同時代人の「Bolshevism 的勝利」に対する評価の一端を示していよう。

実際、「庶民的勝利」では、第一次世界大戦の結果について、政治的には民主主義、社会的には労働主義の勝利であると結論づけている。世界的な潮流として、democracy の勝利を称え、民主主義の戦勝こそ庶民の勝利である。

続く「Bolshevism 的勝利」では、ボルシェビズムという言葉はロシア人の創造したものであるとしながらも、その精神は20世紀世界人類の心中にある共通の覚醒の精神であるとしている。それゆえ、ボルシェビズムの勝利は、20世紀世界人類の心中にある共通の覚醒の新精神の勝利なのであると結論づけている。ボルシェビズムの内容について詳しくは触れていないのである。

マルクス主義への転向

李大釗は大作論文「私のマルクス主義観」(1919年9月、11月)(『新青年』第6巻第5、6号、1919年10月11日)ではじめてマルクス主義や唯物史観について体系的で詳細な紹介を行った。この論文の発表を契機として李大釗がマルクス主義者へ転向したと見なすことは学界の通例である。これ以降「物質変動与道徳変動」(1919年12月1日)、「由経済学上解釈中国近代思想変動的原因」(1920年1月1日)等いくつかの重要論文を矢継ぎ早に発表している。

李大釗のマルクス主義理解については、これまで日本人学者によって、河上肇等の日本語経済学書籍の種本探索が精力的に行われてきた。例えば、斎藤道彦、後藤延子、石川禎浩、三田剛史等の研究が挙げられる。

近年、中国における李大釗研究の進展は少なくない。『李大釗全集』の刊行もあり、1980年代には目にすることができなかった李大釗の論説へのアクセスは容易になった。例えば、中国の学界からは、「私のマルクス主義観」の発表時期について見解が出されている。一説には、1919年9月の発表から考えて9月に近い時期に作成されたと言われている。しかし、北京大学図書館の楊琥は、1919年8月初には「私のマルクス主義観」の原稿が完成していたと主張する[29)]。また最新の『李大釗全集』では、『全集』編者は、1919年5月のマルクス生誕101周年記念に合わせて原稿は基本的に完成していたと推定している[30)]。

私はここで細かい考証研究に立ち入る用意はない。指摘しておきたいことは、李大釗のマルクス主義への転向が1919年のわずか1年間足らずの非常に短い間になされたことである。

むすび

本稿で私が強調したかったのはすでに汗牛充棟の感もある李大釗研究の「空白」である。

従来、「調和論」や壮大な宇宙論との指摘のあったマルクス主義者となる以前の李大釗の思想について、新しい観点からの分析の必要性を指摘した。李大釗の周辺にいた章士釗、高一涵、李剣農などの人物との比較分析はきわめて手薄である。

マルクス主義に関する論説が『新青年』に発表される以前には、李大釗は『甲寅』にロシア革命の実態など欧州の政治情勢について紹介する多数の論稿を寄せている。それらの論稿について、史料公刊が遅れていたため、研究者の言及はこれまで少なかった。それらのいくつかは日本語の雑誌や書籍を知的ソースにしていた。それと関連して李大釗は断片的ではあるが、興味深い日本観を各所に披露している。今後、精緻な分析が必要であろう。

時間の都合上、表面的な学説の紹介にとどまり、本格的な分析にまで深められなかった所が多い。今後の課題にしていきたい。

注

1）満鉄職員の伊藤武雄は後の回想の中で、1922年に北京で李大釗に会ったおり、「吉野先生は健在であるか。私は天津で先生の教えを受けた学生だった」と語ったというエピソードを紹介している。伊藤武雄『黄龍と東風』国際日本協会、1964年、48頁。

2）森正夫『李大釗』人物往来社、1967年、97～98頁。

3）冨田昇「李大釗　日本留学時代の事績と背景――一留学生として」『集刊東洋学』42号、東北大学中国文史哲研究会、1979年。

4）郭華清『寛容与妥協――章士釗的調和論研究』天津古籍出版社、2004年、鄒小站『章士釗社会政治思想研究』湖南教育出版社、2001年、鄒小站『章士釗』団結出版社、2011年、白吉庵『章士釗伝』作家出版社、2004年、等。

5）丁仕原「章士釗与李大釗」『章士釗与近代名人』中国文史出版社、2005年。金淑琴「李大釗与章士釗」中共中央党史研究室科研局編『李大釗研究文集』中共党史出版社、1991年。何立波「章士釗与李大釗的特殊情誼」『党史博采』2007年第12期。

6）章士釗「我所知道的守常」『回憶李大釗』人民出版社、1980年、144頁。

7）「物価与貨幣購買力――致『甲寅』雑誌記者」（1914年8月10日）『李大釗全集』第1巻、人民出版社、2013年、174頁。

8）野村浩一『近代中国の思想世界――『新青年』の群像』岩波書店、1990年、80頁。

9）郭湛波『近五十年中国思想史』上海古籍出版社、2006年（原書1935年）、108頁。

10）B. I. シュウォルツ（石川忠雄ほか訳）『中国共産党史――中国共産主義と毛沢東の抬頭』慶應通信、1964年、9頁。

11）『洪水以後』創刊号、1916年1月。茅原華山『新英雄主義』新潮社、1916年4月に収録。

12）石川禎浩「東西文明論と日中の論壇」古屋哲夫『近代日本のアジア認識』京都大学人文科学研究所、1994年。
13）『新青年』創刊間もなくの時期であり、この当時の李大釗の高くない知名度とこの難解な文体を考えると「青春」が当時、どの程度の読者を得たのかについては更なる検討が必要である。
14）胡適『五十年来中国之文学』『胡適学術文集・新文学運動』中華書局、1993年、96頁。
15）高一涵「回憶五四時期的李大釗」『回憶李大釗』人民出版社、1980年、165頁。
16）楊洪章「早期李大釗対改良派和革命派態度的演変」中共中央党史研究室科研局編『李大釗研究文集』中共党史出版社、1991年、156頁。
17）清水安三「李大釗の死――彼の思想と人物」「李大釗先生の思い出」『石ころの生涯――桜美林学園創立者清水安三遺稿集』キリスト新聞社、1977年、207頁、210頁。
18）高力克「李大釗与中国馬克思主義的起原」『五四的思想世界』学林出版社、2003年、167頁。
19）丸山松幸『中国近代の革命思想』研文出版、1982年。
20）村田雄二郎「理と力――李大釗の「平民主義」」『思想』765号、1988年。
21）他に、李大釗「調和之法則」「調和騰言」『言治』季刊第3冊、1918年7月1日。
22）鐙屋一『章士釗と近代中国政治史研究』芙蓉書房出版、2002年、198−199頁。
23）汪原放『亜東図書館与陳独秀』学林出版社、2006年、33頁。
24）王奇生「新文化運動如何“運動”起来的」『革命与反革命――社会文化視野下的民国政治』社会科学文献出版社、2010年、9頁。『新青年』編纂をめぐる人間関係については近年、解明が進んでいるようである（張耀杰『北大教授与『新青年』』新星出版社、2014年、参照）。
25）楊琥「『新青年』与『甲寅』月刊之歴史淵源」『北京大学学報』2002年第6期。
26）中国知識人の間で1910年代から始まる「公理」や「強権」等の用語で国際関係を説明する際の様々な含意については、吉澤誠一郎「公理と強権――民国8年の国際関係論」貴志・谷垣・深町編『模索する近代日中関係――対話と競存の時代』東京大学出版会、2009年、で示唆的な問題提起がある。
27）執筆時期と発表の時期にずれがある。『李大釗全集』（人民出版社、2013年）の編者によると「庶民的勝利」は1918年11月（『新青年』第5巻第5号、1919年1月）、「Bolshevism的勝利」は1918年12月（『新青年』第5巻第5号、1919年1月）である。
28）「張奚若致胡適」『胡適来往書信選』（上）30〜31頁。

29）楊琥「李大釗『我的馬克思主義観』一文若干問題的探討」牛大勇・欧陽哲生主編『五四的歴史与歴史中的五四――北京大学紀念五四運動90周年国際学術研討会論文集』北京大学出版社、2010年。

楊琥によれば、石川禎浩は『中国共産党史研究』の中で、「我的馬克思主義観」が1919年9月に発表、『晨報』記者陳溥賢の「近世社会主義鼻祖馬克思之奮闘生涯」と「馬克思的唯物史観」が同年4、5月に発表したとし、陳溥賢なくして李大釗のマルクス主義はなかったと主張する。楊琥は石川を「揚陳抑李」（陳を高く評価し、李を貶す）であると批判している。

30）『李大釗全集』第3巻、人民出版社、2014年、41頁。